
IS ～二人目の男子～

流れ星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜二人目の男子〜

【Nコード】

N9897S

【作者名】

流れ星

【あらすじ】

世界で初めて男でISを動かした人間、織斑一夏。その数日後、一夏の幼馴染みである獅子王秋人のところに、篠ノ之東が訪れる。彼女は彼にISを持ってきたのだった。注）原作ハーレムメンバーを壊すつもりはありません。

第一話（前書き）

突発的に書き始めた小説です。更新は不定期になると思います。

第一話

「久しぶりだね、あつくん。元気だった？」

無人のはずだった部屋から聞こえてくる脳天気そうな声に思わず頭を抱えそうになる。

俺に与えられた研究室には、おそらく世界で一番有名な人間が待ち構えていたのだ。

この部屋は機密事項が多く保管されているため、本来なら厳重なセキュリティで守られているのだが、この人ならば、セキュリティなど無かったに等しいものだったに違いない。

篠ノ之束、今や世界最強の軍事兵器になったISの生みの親、その人だ。
インフィニット・ストラトス

「確かに久しぶりです。最後に会ったのは5年ほど前でしたっけ」

束さんは5年前に何も言わずに姿を消した。今さら俺に束さんが何の用だ？

「あつくんはいつくんがISを使ったのはニュースで見たよね」
なるほど、一夏の件か。

一夏は篠ノ之束が認識する数少ない他人で俺の幼馴染みでもある。そして、今やISを動かせることで、世界一有名な男子だ。

「ええ、最近はそのニュース一色でしたから当然です」

あのニュースには流石の俺も驚いた。せつかく千冬さんが一夏のことをISにできる限り近づけないようにしていたのに、それが一瞬で崩れ去ることになったのだ。

そんなふうにな冬さんが一夏に気をつかっているから、俺も帰国してから連絡もしないで、一夏には自分の研究内容を一切教えてないようにしていたのに。

「束さん？」

「何かな、あつくん？」

「いえ、何でもないです」

これは無駄だな。

そもそも一夏は藍越学園を受けるはずだったのだ。カンニング騒ぎで一悶着あったが、急に場所が変更になり、それが偶然IS学園の入試会場近くになるなんて少し話が不自然だと思っていたのだ。

しかし、目の前の人間が本気を出したならば、話は別だ。決して不可能ではなくなるだろう。この人ならば、ISを男子が動かせるように出来ても不思議ではない。

だからこそ、俺は追求することを止めた。別に俺はどこぞの交渉人や政治家みたいに口が巧いわけではない。そんな俺が追求したところで束さんにはぐらかされるだけだ。

「それで何の用か教えてくれませんか。まさか暇つぶしとかじゃないですね」

この人だと、それも否定できないから怖いんだよな。

「うん、今日は違うよ。いつくんだけがISを使えると、あつくんが落ち込むだろうから東さんがあつくんのためにISを用意してあげたんだよ」

「はい？」

そう言っただけで東さんが俺に見せたのは、紛れもなくISだった。

でも、俺の驚きはISがこの場にあることでも、実は俺もISが使えるという衝撃な事実が明かされたからでもなかった。

「驚いた。あつくんは運動があまり得意じゃなかったから、遠距離専用の新しいISを作ったんだよ。火力だけなら他のISよりも遥かに上だからね。これで箒ちゃんやいつくんと一緒にIS学園に通えるよ」

東さんは楽しそうに笑っているが、俺は何も言えなかった。

本当にこの人は気軽に言ってくれるよな。

俺がISを使えることに驚きはない。なぜなら箒や一夏の二人と違って俺は小学生の頃からISに関わってきた。当時は東さん、兄さんと千冬さんに俺の4人でISを開発していたのだ。その過程で何故か俺も使えることが分かったが、兄さんが使えず、その後も男には使えないため、今まで秘密にしていただけだ。

まあ、今はそんなことはどうでもいい。ここにあるのが新しいコアということは、これが468個目のコアになるわけである。世界中が欲している新たなコアがここにあることとなる。

そして、このISは俺がアメリカに留学していた時に遊び半分で自分が使う時の武装の設計だけしたものだ。当然ながら設計図を誰かに見せたことはないし、存在そのものを話したこともなかった。

きつと、東さんが気まぐれに俺のパソコンをハッキングして見つけたものを現実にしたのだろう。

本当に兄さんといい、一夏といい、束さんといい、俺の周りの人間はトラブルメーカーしかないよな。

「束さん、兄さんは何か言っていましたか」

兄さんは束さんや千冬さんと幼馴染みである。そして、束さんが無視しない数少ない同世代の人間でもあった。絶対に今回の件は兄さんも裏で糸を引いている。

「うん、一つだけ。あつくんに伝えてくれだって」

「なんと」

「『他国の人間と付き合うのもいいが、避妊だけはしっかりやれ』だって」

よりもよって、そんなことかよ。他に言うことがあるだろ。

「了解、兄さんに会うことがあれば『地獄に墜ちろ』とでも言うておいてください」

そもそも言葉で伝えられなくても兄さんが言いたいことは始めから分かっている。

俺に一夏を守れ、ってことだろう。相変わらずアイツは皆から愛されているよ。箒の奴はアイツに惚れているし、実は千冬さんもちのブラコンだ。兄さんも俺以上に弟として可愛いがっていた。俺が知らない中学時代でも無意識で女を引き付けていたと断言できる。

それに、あの学校には更識家の人間も在学しているはずだ。あまり借りを作りたくないが、あの連中と協力できれば、大抵のことは

何とかできる自信がある。

「いいよ、分かった。そのIS、鳳仙のデータはそこに置いておくから、じゃあね」

そんな言葉とともに、いつの間にか束さんの姿は消えていた。

はあ、いきなり厄介事が舞い込んできたな。できれば静かに好きな研究だけして一生を終わりたいかったが、これも運命だと思って受け入れるしかない。

それに、厄介事がこれで終わるはずがないに決まっている。俺自身、こんなことになって平和に過ごせるとは思っていないし、絶対に一夏ならば厄介事を引き寄せてくるだろう、主に女絡みで。アイツと友人付き合っていると、それが良く分かる。アイツは無意識のトラブル吸引器だ。

何とかして無事に三年間を過ごして平穏な研究生活を取り戻す。とりあえず今、最初にするべきことは所長にIS学園に通うことを伝えることだ。

そして、次の日

もう一人のISを動かせる男子が現れたというニュースが全世界に広がることになる。

第2話

さてと、今日は帰ってから何をしようかな。

ちよつとISの研究から離れて息抜きに興味に走るのもいいかもしれない。

効率性を完全に無視した武器を作ってみるのも面白いな。

しかし、いくら現実逃避してみても、現実が変わってくれない。

周りには女子、女子、女子である。

このことはよく考えなくても分かることだ。現在、ISを使えるのが女性しかいない以上、生徒も教師も女性しかいないのは当然だ。アメリカ時代もISの研究をやっていたので、周りには多くの女性はいたことにはいた。でも、俺が小さかったこともあって、どっちかというならば周りからは弟扱いされていた。

唯一の救いは一夏の奴と席が近いことぐらいだ。しかし、俺と一夏に用意された席は教室の真ん中、女子達の視線が前後左右から突き刺さっている。

誰だよ、この席順考えた奴。

こういう時に頼りになる幼馴染みであるはずの篤もずっと一夏の方ばかり気にしていて、俺に気付いた様子はない。

あんにやる、本当に昔から一夏のことしか見ていないよな。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏が簡単に自己紹介するが、女子たちの視線はそれで終わりと聞いている。

俺もあんな自己紹介でいいとは思えないけど、それは状況による

と思うぞ。この状況ではまともに自己紹介できる男がいるなら見てみたい。

いや、兄さんなら喜んでやりそうな気がする。

「以上です」

案の定、そこで一夏は自己紹介を終え、クラスメートの女子全員がずっこけた。

その時、俺は気付いた。

いつの間にか来ていた千冬さんが思いっきり出席簿を構えていることに。

「やばっ」

思わず声に出すが、それで一夏に伝わらるはずもなく、一夏の頭に思いっきり振り下ろされる。

バシッ

「まったく、お前はまともに自己紹介もできんのか。山田先生、遅れてすみません」

「いえ、別に」

「な、千冬姉」

あ、バカ。あの人の性格なら。

バシッ

再び振り下ろされる出席簿

「それと、ここでは織斑先生と呼べ。皇、お前はちゃんと自己紹介しろよ」

その後は千冬さんが担任であることに狂喜乱舞するクラスメートを見て、千冬さんが大きくため息をついていた。相変わらず、この人の人気は凄いな。さすがは初代ブリュンヒルデなだけはある。

そして、俺の自己紹介に関しては千冬さんに頭を叩かれるレベルだったただ伝えておこう。

初めてのISの授業は流石は国家の代表たちが入学するだけはあるレベルだった。俺は元々、ISの研究をしていたので、特に難しいとは感じなかったが、一夏はちんぷんかんぷんらしく、何度も千冬さんに頭を叩かれることになった。

まあ、事前に渡された教科書を古い電話帳と間違えて捨てたことは自業自得だと思う。

昼休みになって、ようやく一息つくことができ、俺は一夏や箒と一緒に屋上にいた。

アメリカ時代もそうだったが、人って珍しいものがあると集まるもんなんだな。休み時間の度に、他のクラスだけでなく、上級生までも教室の前にまで来て、何も言わずに見ているだけなのだ。

まったく、動物園のパンダにでもなった気分だ。

「それにしても、久しぶりだな。元気だったか」

「元気といえば元気だが、憂鬱であることには変わらないな。俺は一応大学を出ているんだぞ。何で、また高校の勉強をやらなきゃい

けないんだよ」

これは偽らざる本心である。ここだってISのことだけを訓練したり、勉強するだけの場所ではない。普通の高校の勉強だってあるのだ。

ちなみに箒は俺が改めて自己紹介するまで俺という存在を忘れていたらしい。いや、幼馴染みから向けられる誰っていう視線は辛かったな。

「箒も久しぶりだな。元気だったか」

「ああ」

まだ箒の気まずい感じが抜けてなかった。さすがにもう一人の幼馴染みを完全に忘れていたことを悪いと思っていろいろらしい。それに相変わらず無愛想だ。俺はもうちょっと愛想を良くした方がいいと思うんだけどな。

「そういえば、かなり連絡がなかったけど、何をしていたんだ？」

「ま、色々だな。アメリカに4年ほど留学して、去年卒業してから実家の研究室でISの研究ばかりしていた」

ま、研究室では実質二トに近い生活だったとは言えない。日本は第三世代兵器の開発よりも第一形態での単一能力の開発に力を注いでいるせいで、アメリカで第三世代兵器の研究や開発をしていた俺が協力できることは少なかったのだ。

「しかし、秋人もISを使えたのだな」

ああ、そのことか。

「今まで二人には言ってなかったけど、俺は小学生から束さんの開発には協力していたんだよ。その時に使えることが分かったけど、さすがに小さかったしな。兄さんたちが全力で揉み消したんだ」

「へえ。まあ、幼馴染みが二人もいてくれて助かるよ。さすがに男一人つてのは疲れるしな」

そんな説明とも言えないような説明であつさり納得してくれ、俺がISを使えることよりもIS学園に幼馴染みがいてくれて助かったと言つ一夏に思わずため息が出る。

おいおい、俺と一緒にの扱いにすると、箒の奴が拗ねるぞ。

二人と別れたのは5年前だが、二人とも全く変わってないな。

そして、今いる場所のせいか、話題は自然とISに移っていく。

「あ、それがお前のISか？」

俺のISの待機状態はペンダントになっている。アクセサリーを好まない俺としては時計みたいな普段から身につける物が良かったのだが、待機状態を変更できないので諦めて身につけていた。

一夏のISは専用機が用意されるらしく、倉持事研が全力を挙げて早急に組み立てる予定と実家から情報が入っている。

そのため、しばらく日本の代表候補生のISは先送りにされるらしい。

「専用機があると色々面倒だと思うけど、お前も頑張れ」

俺も束さんにISを貰ってからIS学園に入るための書類と色々な国との交渉などに時間の大半を割かれていた。

だから、俺が『鳳仙』を実際に動かしたのは、まだ数えるほどしかない。

「マジか？」

「ま、その辺は俺もフォローするから覚悟しておけ」

「ふん」

話題選択間違えたな。IS関係の話は幕にはタブーだった。まだ束さんと仲直りできてなかったらしい。

授業が終わると、寮に帰る道の途中で俺は一夏と別れた。IS学園は全寮制の学校であり、普通は二人一部屋となっているのだが、俺には別の部屋が用意されている。

一夏の方もマスコミたちから遠ざけるために緊急で寮に部屋を準備したらしい。

先に俺に一人部屋が用意される理由は、俺自身の機密情報を守る必要があるからだ。

さらに、後継者でこそないが、俺は皇財閥の次男であり、財閥の私兵として貴重な戦力になると思われるから、皇財閥の方がIS学園に圧力をかけたためだ。

そのため、俺は皇財閥とIS学園が用意してくれた専用の部屋に住むこととなる。さすがにガードマンこそいないが、機密保護のために、俺のISの調整には皇財閥に関係ある研究者たちが勤めることになっていた。

「やれやれだ」

自分でも思った以上に疲れがたまっていたらしい。IS学園への入学初日、俺はあっさりと眠りの世界に落ちた。

だから、遠くの方から一夏の叫び声が聞こえたのはきっと夢に違いない。

うん、そうだ。

第3話

「あの皇財閥の次男が昔からISと関わっていたなんて、さすがのお姉さんも驚いたわ」

更識は俺の自己紹介を聞いて『驚愕』と書かれた扇子を広げる。学校が始まって二日目、わざわざ時間を作って生徒会室に来たのは更識に一夏の護衛の協力を頼むためだ。そのため、俺のことを知ってもらうために自己紹介をしたわけだが、一言だけ修正する。

「俺は一応年上だぞ。一夏の幼馴染みではあるけど、諸事情で2年ほど小学生に入るのが遅れたからな」

だから、小学生の時は孤立することになり、暇つぶしで兄さんに付き添ってISの研究所である束さんのところに行ったことが俺がISの研究を始めるきっかけでもある。

「なら、私は敬語で接した方が良かったかしら」

「いらん。あんたに敬語なんか使われると気持ち悪いだけだ。それに、俺も面倒だからアンタに対して敬語を使う気はない」

「あら、私だって皇に敬語なんて求めないわよ」

「ちょっと話がズレたな。俺がここに来たのは護衛の協力だ」

その瞬間、更識のお茶目さは消え、楯無としての表情に変わる。

「一応、話なら上から聞いているけど、IS学園の守りは世界でもトップクラスよ」

「そんなことは最初から俺も知っている。でも、ここのセキュリティを破ることが不可能なわけではない。俺だって時間が貰えるならシステムダウンぐらい簡単だ。俺が頼みたいのは別に学園のセキュリティを上げるなんてことじゃない。ただ一夏自身のISの実力を上げてほしい」

「一部聞き流せないところがあつた気がするけど、織斑くんの実力を上げたいなら、あなたが教えてあげればいいんじゃないの」

それができるなら頼みに来なかつたよ。

「裏で楯無の名前は重い。俺個人が近くにいるよりも、そちらの方が遥かに牽制になる。実際に、この学園にはその歳で楯無の名前を継いでいる人間がいるんだ。俺よりも適任だろう。あとは俺自身もISの操縦技術を上げないといけないし、何よりも皇からの命令もある。いつもいつも一夏の傍にいられるわけじゃない」

「分かつたわ。とりあえず頼まれてあげる。でも、しばらくは観察させてもらつたわよ」

ま、簡単に引き受けてもらえるとは思っていなかったが、俺自身のことを隠していたせいで、少し警戒されているみたいだな。

「了解だ。アイツに接触する時期はお前に任せる」

これで生徒会室に来た用件が終わったので、ずっと我慢していた

ことに突っ込む。

「うーん」

「あれはここでは普通なのか」

俺が生徒会室に来てから、布仏はずっとソファで寝ていた。ここに来る前、俺が職員室に寄ってから来たとはいえ、職員室にいた時間は数分ほどしかない。つまり、布仏は数分であの熟睡状態になっているわけだ。

「まあ、男の子なんだから細かいことは気にしない」

「やれやれ」

「あら、もう帰るの」

「そりゃ、初日は何もせずに寝たし、まだまだISの調整とかもしなければならぬからな」

それに、今日は一夏たちと晩飯を食べる約束もしているし、その前に山田先生に頼みたいことがある。

生徒会室から出たとき、布仏の姉の方がこちらに来ていた。

「あら、来ていたんですか。お嬢様に御用でしたか」

「まあな、用件はもう済んだから帰るところだ」

「なにも出さずにすみません」

相変わらず姉の方は生真面目だな。妹も少しはこの姉を見習ってほしいものだな。

「それこそ、そっちが気にするな。お前にも用事くらいあるだろうし、事前に連絡もなしで、いきなり来たのは俺の方だ。もともと長居するつもりもなかった。またな」

「それでは」

さつきは山田先生はいなかったから、また職員室に行かないとな。

「すみません。皇ですけど、山田先生はいますか」

「へ、皇くん。あつ」

職員室では山田先生はおやつタイムのようだ。その容姿もあつて、シュークリームを食べている姿はどう見ても大人には見えない。それこそ高校生でも通じるだろう。

「えっと、何か私に用ですか」

そして、慌ててシュークリームを食べきったのはいいのだが、頬にクリームがついている。

放っておくのも可哀想なので、笑いそうになるのを抑えながら指摘することにした。

「先生、落ち着いてください。まだ頬にクリームがついています」

「わ、わ」

クリームを拭き取り、山田先生が落ち着いたところで、ようやく用件を言うことができた。

「わ、私が皇くんの訓練を」

「ええ、元日本の代表候補生でもあり、副担任でもある山田先生に頼んでいます」

「それなら、織斑先生が」

「頼めると思いますか」

今日の女子の反応を見る限り、それは難しいとしか言えない。千冬さんに個人的に鍛えてもらっているなんて、周りに知られたら、相当面倒なことになる。

それに、俺の武装はほとんど射撃タイプだ。雪片一本で世界の頂点に立った人よりも、山田先生みたいに射撃も基本的になす人の方がわかりやすく教えてもらえるとと思ったからだ。

だから、決して千冬さんが怖いわけではないのだ。そう、これは適材適所というやつなのだ。

「わかりました。それなら先生に任せてください」

よっぽど生徒から頼られて嬉しいらしい。今までは高校生に見える容姿から頼られることが少なかったんだろうな。

「それでは時間が取れる時は連絡してください」

これで今日中にやっておきたいことは済んだな。後は部屋に戻って鳳仙の調整でもするか。

「皇、良いところにいた」

「千冬さん」

「まったく、お前も学校では織斑先生と呼べ」

先生、出席簿が痛いです。

「すみません。それで、わざわざ放課後に用って何ですか」

「あまり、人前で話すことでもないからな。今度のクラス代表の件だ。やはり、お前は出られないでいいんだ」

「まあ、情報流出はできる限り抑えるのが、方針ですからね」

クラス代表になると、人前に出ることが増えるし、ある程度は周りに機体性能などを公開する必要もある。それは避けたい実家の方針もあって、俺は始めから辞退する予定なのだ。

「わかった。私が聞きたいことはそれだけだ」

「それでは、失礼します」

やれやれ、これも皇の家に生まれた運命かもしれないけど、実家からここまで露骨に兵器扱いされるとは思わなかった。

自分が思った以上に、俺は両親の愛情に期待していたらしい。実家からの方針を聞いた時に、自分が兵器として扱われていることに

ショックを受けた。

「まだまだ俺が甘いのか。それとも、人らしさが消えていないことを喜べばいいのか微妙だな」

「で、何をやっているんだ」

食堂に行く途中で一夏たちと合流することになったんだが、非常に筭が不機嫌なのは何故だ。

「一夏、何をした」

「何で俺なんだよ」

「俺には、お前が何かをやったとしか思えん」

そもそも一夏と違って俺には筭を怒らせる理由がない。今の俺と筭の関係は幼馴染みよりもクラスメートの方が近い。そもそも存在を忘れられていたくらいだし。

「ただ今日も一緒に晩飯を食おうって言ったただだよ」

その言葉で事情は分かっってしまう。つまり、筭は二人で食べることを期待していたわけだ。だが、実は一夏が俺も誘っていることを聞いて不機嫌になったか。

席に着いた頃には筭の表情も元に戻っていた。さりげなく一夏の隣に座りやがった。

「そついや、一夏の部屋はどこなんだ。今度、遊びに行くから教えてくれ」

「ああ、まだ言ってなかったか。俺の部屋は箒と一緒になんだよ。だから、遊ぶなら、お前の部屋にしないか」

「いや、俺の部屋は面倒なことも多いしな。いや、一夏なら別にいいの、ちよつと待て」

コイツ、さらつと聞き捨てならないことを言わなかったか。

「な、なんだ」

「何で男女が同室なんだよ」

「わからん。俺は先生に言われたただけだし」

「箒はどうなんだ」

「い、一夏が不満ないなら、私は構わない」

まあ、あなたならそう言うでしょうね。本当に、一夏はここまで言われて、よく気付かないまままでいられるよな。一夏の恋愛事情なんて俺には関係にないことだし、別にいいけどさ。

「そつちも面倒事って何だ」

「先に説明するけど、お前たち二人は織斑千冬、篠ノ之束の関係者だ。確かに、この二人は有名だし、影響力も大きいけど、あくまで

個人でしかない。でも、俺の場合は話が変わってくる。俺は皇財閥の人間だ。皇はかつて天皇の血も入っている噂があるほどの家系だ。そのせいか、今では海外から皇は日本を代表する家系と見られている」

何が言いたいのかわからず、首を傾げる二人。少し話が遠回りし過ぎたか。

「ま、簡単に言えば、皇とは日本そのもの。だから、俺が他国の人間と下手に仲良くなると臍原に見られるんだ。皇はあの国と親密になるつもりか、てな」

「お前も色々大変なんだな」

実は、そう言っているお前の方が絶対に変になるだけだな。

俺が日本から引き抜けないから、一夏に自由国籍を与えて自分の国に引き抜こうとする動きもある。今のところは千冬さんが睨んでいるせいで、進んでいない。

ちなみに俺がアメリカに留学してISの開発に関わることができたのも、日本と協力している研究所だったからだ。それでも、俺が唯一深く関わったアメリカの第三世代型IS《銀の福音》シルバー・ゴスベルも結局は基礎的な部分しか手伝えなかった。

東さん仕込みのハッキングで、《銀の福音》シルバー・ゴスベルの開発過程は全て見ていたし、そのおかげで空いた時間に他国にハッキングして第三世代型の情報を集めることができたので、悪いことばかりではなかった。今、俺の手元には日本以外にロシア、イギリス、ドイツ、アメリカの第三世代のデータがある。これらのデータは《鳳仙》の調整にも活用させてもらっている。

「ま、ややこしい話は今度にしようじゃないか。そういや、筈はも

う部活を選んだのか」

「ああ、私は剣道部に入るつもりだ」

そっぴや、コイツは昔から剣道を続けてたっけ。

「一夏は？」

「まだ決めてないな。秋人はどうするんだ？」

「まだ部活のことを調べてないから分からないけど、あるならコンピュータ関係だな。時間が取れないかもしれないけど」

晩飯の後は《鳳仙》の調整だ。

予め千冬さんに話を通しておいたので、調整室には皇財閥関係の技術者以外はいなかった。

しかし、どうやら招かざる客も来ているらしい。第一段階のプロテクトで手間取っているところを見ると、ハッカーは大したレベルではないみたいだ。

このレベルなら下手に手を出す必要ないな。

「秋人様、接近用が一つしか装備されていませんが」

「構わない。代わりに敏捷性だけは上げておいてくれ。基本的に相手を近付けさせないで、後は中遠距離で対応する」

流石は東さん特製のISなだけはある。かなり実力が必要なピーキーな機体だ。全体的に装甲は薄めで、高機動、高威力を追求して設計されている。

破壊力、制圧力だけなら《銀の福音》以上か。

「秋人様、ここは」

「ああ、俺が作っておいた武器に付け替えてくれ」

さあ、ここからが大変だ。俺が作った武器に付け替えた後、エネルギーの分配から機体のバランスまで気をつけなければならない。はずだったのだが、

「秋人様、やはり篠ノ之束は天才ですね。ここまでの設計、ほとんど無駄がありませんでした。さらに、秋人様の武器を組み込んでもISの方から合わせてくれている感じがします」

さすが束さん、俺が開発している武器のことも知っていたか。

「全くだ。俺もあの人に出会うまでは自分こそが一番の天才だと思っていたよ」

「それは私も同感です。ISのコアを解析しようとして、今までのプライドを完全に砕かれましたからね」

しばらく技術者たちと雑談した後、学校のコンピュータからデータを完全に消去する。

結局、侵入者はプロテクトを突破できなかったみたいだな。

「さて、調整も終わったし、俺は寝る。兄さんにデータを届けておいてくれ」

「了解です」

side???

二人の女性は秋人が使っていたコンピュータの履歴を見るが、そこには何も残されてなかった。

「やはりデータは全く残っていません。復元も完全に不可能です」

「それも当然だな。アレも篠ノ之束ほどではないが、間違いなく天才だ。優秀なだけの連中では手も出せまい」

「でも、いいんですか」

「構わんさ。政府が手を出したことはアレもすでに気付いている。気付いていて無視しているんだ」

「私たちはどうすれば」

「どうせ政府の一部が勝手に暴走しただけだ。また裏で適当に処理されて終わる。上層部も見て見ぬ振りをして失敗して当たり前、成功すれば儲け物程度に考えていたのだろう」

立っている方の女性は大きな溜め息を吐く。

「しばらく彼の方は任せます」

「は、はい。分かりました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9897s/>

IS ~二人目の男子~

2011年10月26日14時59分発行